

Contents

特集：ケリー民主党戦略を読む（後編）	1p
< 今週の”The Economist”誌から >	
”Veteran appeal” 「ベトナム帰還兵の訴え」	7p
< From the Editor > 「恐竜のしっぽ」	8p

特集：ケリー民主党戦略を読む（後編）

先週に引き続き、米民主党全国大会についての分析をお送りします。その前に、先週号で指摘したポイントは、概ね以下の通りです。

- ・ 両候補の政策は今後も変更がありうるので、現時点で対比してみてもさほど意味はない。
- ・ ほぼ確実なのは、議会選挙は共和党が優位であること。
- ・ 選挙戦は、両党がごくわずかの”Undecided Voters”と激戦州を取り合う戦い。
- ・ ケリー候補は勝利への条件を次々にクリアしてきたが、課題はまだ残されている。
- ・ 今回発表された民主党の政策綱領は「やっつけ仕事」の感が強い。

今週号では、ケリー候補の指名受諾演説および党大会全体への評価、さらに民主党の政策構想の問題点などについて取り上げます。

指名受諾演説は苦心の作

まずは先週号で間に合わなかった、ケリー候補による「大統領候補指名受諾演説」に対する評価から始めたい。

事前にこれほど注目を集めた演説は少ないだろう。現時点で世論調査をすると、ブッシュ対ケリーはほぼ半々の結果が出るのだが、ケリーをよく知っているという米国民は全体の半分程度しかいない。すなわち、**現時点ではまだ「ケリー支持者 = 反ブッシュ」であり、民主党としては今後、ケリー本人を売り込んでいかなければならない。**そのための機会といえば、党大会における指名受諾演説が最適であり、これを逃すと次は秋のテレビ討論会を待たなければならぬ。事前に並々ならぬ意欲と準備があったことは想像に難くない。

演説の出来は、「上々」といって良いだろう。以下、いくつかの要素に分解して3段階評価してみよう。

<メッセージ> : A

みずからの人となりを語るとともに、「力と「統合」を訴えた。ほぼ1時間、約5100語の演説中に”Strong”を12回、”Strength”を5回使っている。民主党が苦手とされる安全保障問題を前面に打ち出し、「戦時大統領」足りうることをアピールした。瑕疵があったとすれば、イラク戦争についての態度表明があいまいであったことくらいか。

ブッシュ批判を控え、「国家の分裂ではなく統合」を訴えた点も好感度が高い。ブッシュ陣営のネガティブ・キャンペーンに応酬せず、みずからの誠実さをアピールした。

<パンチライン> : B

演説全体に題名をつけるとしたら、「”We are here to make America stronger.”」であろう。これは党大会と政策綱領にも通じるテーマで、民主党指導部に「全体に横串を刺す」構想があったことが窺える。

いわゆる”Memorable Line”（記憶に残る言葉）としては、「”America can do better. And help is on the way.”」を5回繰り返した。こちらは民主党の伝統的価値観を示しており、タカ派的な言辞が多くなった分の「バランスを取る」意味がありそうだ。

<パフォーマンス> : C +

ここが一番心配されたところで、ケリーは途中、何度も観衆の拍手をさえぎって話を進めようとするなど、「演説ベタ」が目立った。会場の空調が悪かったせい、汗をかいているシーンが流れたのも減点対象。が、とにかく致命的な失敗はなかった。

「ベトナム経験」を強調し、かつての戦友を多数動員した。スピルバーグ監督によるケリーの半生をまとめたフィルムを流し、BGMにはブルース・スプリングスティーンの”No Surrender”を使用。きめ細かな演出だが、冒頭で敬礼して、”I’m John Kerry, and I’m reporting for duty.”（ジョン・ケリー、任務に当たります！）を第一声にするという「小技」は、やり過ぎだったような気もする。

<全体の印象> : B +

民主党支持者としては、「無事に終わってホッとした」というのが正直なところだろう。3ヶ月前から構想を練り、党の総力を結集したイベントだった。3大ネットワークが放映する時間帯に主役を集めて「強い民主党」の印象を作り、それ以外の部分ではあいもかわらぬ「古い民主党」の主張を流して党内の「ガス抜き」を狙うなど、細かな工夫が随所に目立った。打倒ブッシュに賭ける意気込みが、最大限のチームワークを可能にしたといえる。

ただし振り返ってみると、党大会でもっとも成功を収めたのは基調演説に抜擢されたオバマ・イリノイ州上院議員であり、次いでクリントン前大統領、エドワーズ副大統領候補らであった。主役が脇役に食われてしまった感は否めない。クリントンやブッシュが選出されたときの党大会では、ほかの誰が何を言ったかなどは、誰も覚えてはいないものなのだが。

指名受諾演説を読む

演説の中では様々な政策課題が語られている。これは政策綱領にもあい通じることだが、「安全保障政策で右に寄った分だけ、経済政策では左に振れた」という印象がある。

指名受諾演説の要旨

- <目標> 「米国を強く、世界で尊敬されるように」「ホワイトハウスの尊厳と信頼を修復する」
- <イラク戦争> より多くの同盟国と負担を分かち合う
- <外交> 「必要ときには武力行使をためらわない」 / いかなる攻撃にも速やかな反撃を / 「どの国や国際機関にも、わが国の安全保障に拒否権は持たせない」 / 核不拡散に国際的な努力を。
- <防衛> 4万の兵士を追加 / 反テロ活動のための特殊部隊を倍増 / 州兵や予備役の「裏口徴兵」を停止 / 戦争は「必要ときだけ」 / 「平和を獲得するプランのない戦争」は戦わない
- <安全保障> 9/11委員会の提言を即時実行 / 入港するコンテナ船を検査 / 核・化学工場を保護
- <経済> 「製造業を再活性化」 / 良質な雇用を創造する技術や改善に投資 / 「雇用を海外に移転する企業を利する」税の抜け穴をふさぐ / 国内では「良質な雇用を作り、守る企業」を利する / グローバル経済の中で米国労働者が競争できるよう「公正な競争の場を整備」
- <税制> 「年金は民営化せず。給付も切り下げず」 / 財政赤字を4年で半減 / 中間層への減税 / 中小企業への税負担軽減 / 年収20万ドル以上の個人への減税を廃止 / 「Pay as you go」原則
- <教育> 親と教師、学校に説明責任を / 1クラスの人数を削減 / 大学生の家族への税額減免
- <医療> 医療を「すべての米国人の権利」に / 医療効率化で1世帯年間1000ドルの節約 / 患者が医者を選べるシステムを / 保険会社ではなく、患者と医師に決定権を / 高齢者向け薬価の低減
- <エネルギー> 新技術と代替燃料に投資 / 未来カーに投資
- <選挙戦> 「反対だけでなく、楽観的に」「米国の家族に分裂ではなく統一を」 / 「心の狭い攻撃ではなく、大きなアイデアの競争を選挙戦で」

先週号の繰り返しとなるが、こういった公約は今後の政治動向次第でいかようにでも変化するので、鵜呑みにしてはいけない。むしろ注目すべきは、個々の公約の裏側にある選挙事情である。

たとえば、指名受諾演説と政策綱領の両方で注意深く避けられている話題に、「京都議定書」がある。民主党は、ブッシュ政権が京都議定書から離脱したことを「環境軽視」「単独行動主義」と非難しており、ここで復帰をコミットしないのは奇妙なことに見える。が、今回の選挙ではオハイオ州、ミシガン州などの製造業州が重要であり、これらの州で労組の支持を得ようと思ったら、環境問題は「一時棚上げ」せざるを得ない。政策は候補者や党の理念の発露ではなく、さまざまな妥協の産物だと心得ておくべきだろう。

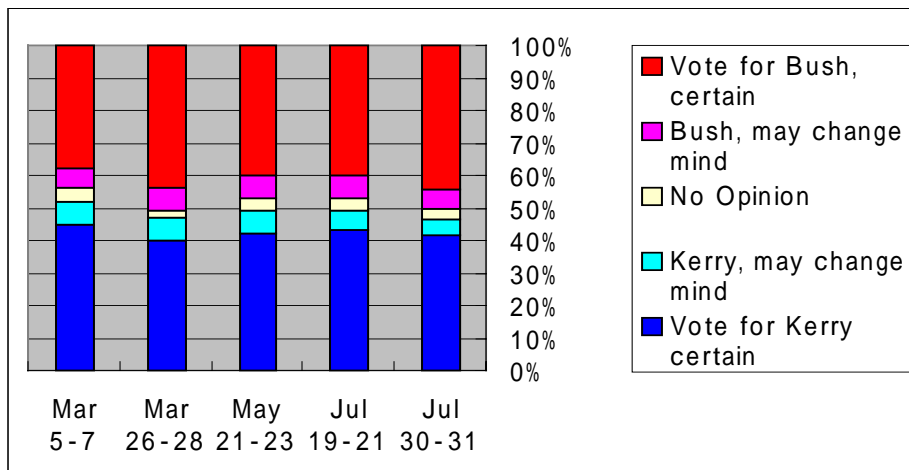
ほとんど動かなかった浮動票

かつてクリントンの選挙参謀を務めたポール・ベガラは、今回の民主党大会を”Mission Accomplished”と称している。文字通り「所期の目的は完遂」したというわけで、たしかに物事は計画通りに進んだ。それでは、期待通りに党大会をバネにしてケリー支持が増えたかという、そうではなかったようだ。

ギャラップ社の調査¹によれば、**党大会の「使用前、使用后」の数値はほとんど変化がなかった**。すなわち、7月19-21日調査ではケリー49%対ブッシュ47%だったものが、7月30-31日調査ではブッシュ50%対ケリー47%と、逆にブッシュが逆転する形になっている。ちなみに調査対象を「登録済みの有権者」に限ってみた場合は、党大会前はケリー49%対ブッシュ45%だったものが、大会後はケリー50%対ブッシュ47%とリードを保っている。

要するに両者の差はほとんどないのである。下記のグラフは、同じ調査を両候補に対する思い入れの深さで分けたもの。設問は、「この秋の選挙で誰に投票するかは決めていますか？それとも11月までに考えを変える可能性がありますか？」である。これで見ると、**それぞれ4割台の有権者が「ブッシュかケリー」で投票行動を決めてしまっており、「未定」や「変更もあり得る」という回答はきわめて少ない**。

Intensity of Commitment to the Candidates



7月30-31日分の調査を見ると、「浮動票」と呼べるのは「未定」3% + 「ケリーだが変更可」5% + 「ブッシュだが変更可」5% = 13%しかない。これでは「党大会をバネにX%アップ」などという思惑は空振りに終わらざるを得ない。おそらく8月30日から始まる共和党大会でも、それを機にブッシュの支持率が一躍浮上するということもなさそうだ。

¹ Presidential race remains close; No convention bounce (August 01, 2004)

ケリーの今後の戦いでは、残り少ない浮動票をいかに引き込んで、11月2日に投票所に向かわせるかという点が鍵となる。浮動票は、普通の有権者に比べて政治に対する関心が低いと考えられるので、通常の選挙戦の手法では効果が薄い。それこそクリントンがやったように「深夜番組やタブロイド紙に登場することで、普段は政治に関心のない層に訴えかける」など、通常の枠を越えた手法が望まれる。

この点で、マイケル・ムーア監督の『華氏9/11』のヒットや、ロック歌手、ブルース・スプリングスティーンのコンサートなど、「反ブッシュ芸能人」の応援の輪が広がっているのはケリーにとって好材料だ。政治に関心がなくても、映画や音楽には興味があるという層に対し、この手のゲリラ戦は有効なはずだ。数々の「不規則発言」で物議をかもししているトレイザ夫人の存在も、ケリー陣営の話題作りには役立っているだろう。とにかく、主役である本人が目立たないことには始まらない。

民主党の経済政策にご用心

米大統領選挙においては、副大統領候補、党の政策綱領、指名受諾演説の3点が揃うと、ほぼ候補者の全容が明らかになる。党大会を終えた現在、ケリー候補の「3点セット」も出揃ったが、そこから見えてくるのは、激戦州の多い「中西部シフト」である。

- (1) エドワーズは南部での票の獲得を狙うというよりは、「製造業州におけるブルーカラー層に訴えかけられるキャラクター」として選ばれた。
- (2) 政策綱領と指名受諾演説では、安全保障問題を前面に押し出し、中西部有権者の保守的な気風に対応した。
- (3) 経済政策ではミドルクラスと製造業重視を打ち出した。

選挙戦の現状を考えれば、これはまったく理にかなった選択である。

が、日本から見て、この中でもっとも気になるのは の経済政策である。指名受諾演説における経済政策のポイントは以下の4点。

- New incentives to "revitalize manufacturing" (製造業の活性化)
- Invest in technology and innovation to create "good-paying jobs" (技術革新への投資)
- Reward companies that "create and keep good-paying jobs" at home (企業のアウトソーシングとオフショアリングへの対応)
- "Fair playing field" for American workers to compete in global economy (国際競争条件の是正 = 他国に市場開放を求める?)

中西部の五大湖沿岸州における最大の問題は「失業」だ。今年6月の全米の失業率は5.6%

と、ブッシュ政権のピーク時である6.3%（2003年6月）からは改善傾向にあるが、これらの州では特に「製造業で失われた雇用」が大きいことが争点となる。

しかしあらためて考えてみれば、米国経済はこれだけ好調なのに、なぜ製造業の雇用改善がはかばかしくないのか。あるいは設備投資は活況を呈している（2003年は3.3%成長）のに、設備投資稼働率が75%程度に留まっているのはなぜなのか。

おそらく**米国経済は、需要が伸びても国内で生産が伸びず、輸入品が増える構造になっている**のであろう。極論すると、「景気が良くなると、雇用が増える代わりに貿易赤字が増える」のである。これは米国企業が、コストの高い国内生産をあきらめ、その分を輸入しているから。いわばグローバル時代に対応した合理的な経営であり、資本市場が企業に対して高い資本効率を求めているからでもある。そのところを無視して、政策的に「製造業の雇用を増やせ」といっても、おそらくはうまくいかないだろう。

あまり考えたくはないことだが、米民主党がこのような状況に苛立って、「貿易赤字を減らすことで、失業問題を解決しよう」というアジェンダ・セッティングをしてしまう可能性がある。90年代前半のクリントン時代には、そういう政策が本当に実行された。すなわち、（1）貿易黒字国に対して市場開放を求める、（2）産業政策で国内の供給力を改善する、（3）為替調整によって輸出を増やし輸入を減らす、などである。

その結果がどうだったかという点、**もちろん赤字も失業も減らなかったし、日本にとって**は愉快ならざる記憶が残ったわけである。いささか被害妄想めくが、「ケリー政権誕生」の場合は、こういう筋書きも頭の片隅に留めておく必要がある。

謙虚なひとこと

最後にケリーの指名受諾演説の中で、いかにも彼の人柄がにじみ出ている部分をご紹介します。これは演説の最後の部分で、自身の信仰について触れただけである。

And let me say it plainly: in that cause, and in this campaign, we welcome people of faith. America is not us and them. I think of what Ron Reagan said of his father a few weeks ago, and I want to say this to you tonight: I don't wear my own faith on my sleeve. But faith has given me values and hope to live by, from Vietnam to this day, from Sunday to Sunday. **I don't want to claim that God is on our side. As Abraham Lincoln told us, I want to pray humbly that we are on God's side.** And whatever our faith, one belief should bind us all: The measure of our character is our willingness to give of ourselves for others and for our country.

「神が味方してくれるように」ではなく、「自分が神の側にいられるように謙虚に祈りたい」という一節は、何かというと神を口にするブッシュに対する巧みな批判になっている。ケリーの思慮深さ、謙虚さがにじみ出ている演説の「聞かせどころ」だが、他方で観衆の拍手喝采を受けるような派手さがないところが、いかにも彼らしいといえよう。

< 今週の”The Economist”誌から >

”Veteran appeal”

「ベトナム帰還兵の訴え」

United States

August 6th 2004 P.29-30

* 民主党大会では、ケリーの「ベトナム帰り」の経歴が演出材料に使われました。その効果やいかに。口の悪い”The Economist”誌の評価は案の定、辛口です。

< 要旨 >

党大会の前日は始球式に臨み、イラク、アフガン帰りの兵士のミットめがけてボールを投げてみせた。翌日は1000人の退役軍人がホテルを囲んで氣勢を挙げた。いよいよ指名受諾の日には、35年前にメコン川をパトロールした仲間とともに船でボストン港に到着した。壇上で紹介の労を取ったのは、元戦友のラスマンと戦傷者であるクレランド元上院議員だった。

民主党の目的は3つ。国民の半数が知らないケリーの半生を伝える、戦争問題でも党内が一致できることを示す、ブッシュの退場を願っていることを示す。退役軍人たちのお陰で、これらの目標は達成された。選挙は政策よりも人柄で決まる。ケリーの上院生活や資産家ぶり、上品さは多くの米国人になじまないものだ。その点、ベトナム経験は、彼に闘争経験があり、仲間の信頼を勝ち得る人物であることを示してくれる。ある退役軍人いわく。「彼が今日、『地獄に行く快速艇にあと一人必要だ』といえ、すぐに集まるだろう」

民主党は防衛問題に弱いという見方と戦うにはいい作戦だ。すでに確保した半数弱の支持者から上積みを狙うためにも、ケリーは戦争に力点をおかなければならない。無党派層にとっては安全保障問題こそが重要であり、そのことは2002年中間選挙で立証済みだ。

かつてはまとまりのなさが売りだった民主党も、今回は結束した。左派は沈黙し、ディーンでさえ「何でもする」。挙党一致で「問題は世界なんだ、馬鹿野郎」路線を演出した。カーター元大統領以下の顔ぶれは、揃って「戦争支持と多国間主義」を説いた。イラク戦争が問題ではなくて、米国の兵士と評判が危ないのだと。ゴアは政府批判を緩め、クリントンは自分やブッシュと違ってケリーはベトナムに行ったと賞賛した。割り振りも申し分なかった。初日は党の結束を見せ、2日目は新星オバマ、3日目にはエドワーズが見せ場を作った。

大会の演出は2000年の共和党を髣髴とさせる出来だった。党の政策綱領は安保問題に終始し、外交内政チームが揃ってイラク戦争や核不拡散問題を訴えた。

が、ここで3つの疑問がある。(1) 音響や政策は変わっても、党は本当に変わったのか。参加者の86%はイラクからの撤退支持だった。外交に重点を置いたお陰で、内政や通商問題を気にする左派は沈黙した。が、ケリー政権誕生なら内紛は不可避である。(2) 安保問題ではブッシュが一目置かれている。逆に35年前はともかく、イラク問題などへのケリーの投票行動は疑問視されている。(3) 党大会の成功は幸先がよいが、それだけで雰囲気は変わらない。1980年のレーガンも最後まで疑念を持たれていた。売り込みはまだまだ先が長い。

< From the Editor > 恐竜のしっぽ

夏休み中の次女Tを連れて、日本経済新聞社/テレビ東京主催「驚異の大恐竜博」(<http://www.kyoryu.jp/home.html>)に行ってきました。初めて見る恐竜に対し、彼女の反応は「これ、トカゲに似ているね」でした。「サウルスというのはトカゲのことだからね」と教えると、「じゃあ、恐竜もしっぽを切って逃げる？」

さあ、分からない。見たところ、恐竜のしっぽは骨が入っているので、簡単には切れそうではない。はて、トカゲのしっぽには骨が入っていないのだろうか。また、恐竜博の目玉商品であるアジア最大のチュアンジェサウルスのように、全長27メートルの恐竜のしっぽが切れて跳びはねていたら、どんな光景になるのだろうか。

この疑問に答えてくれたのは本誌愛読者のF氏でした。それによると、

- ・トカゲの尻尾には骨が入っています。
- ・恐竜の尻尾にも骨が入っています。
- ・「恐竜の尻尾切り」は無理でしょう。それだけ大きな部分を再生することはできないだろうと見られているからです。

お陰で納得が이었습니다。仮に草食恐竜が、危険のたびに「しっぽ切り」で難を逃れていれば、肉食恐竜は好きなときにいつでも太くて長い「しっぽ」にありつけるので、ともに飢えることなく共存共栄ができたことでしょう。それは大自然を生き抜く生物の姿としては、いささか美しすぎる話であったようです。

ま、それはさておいて、入場料の大人2500円はちょっと高めですが、道路が広く、地下駐車場も空いている幕張メッセは、お休みの日のドライブには好適です。暑い日が続きますが、皆様も良い夏休みをお過ごしください。

* 溜池通信は来週から恒例の夏休みに入ります。次回は9月3日(金)にお送りする予定です。

編集者敬白

本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、双日株式会社および株式会社双日総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問い合わせ等は下記あてにお願いします。

〒107-0052 東京都港区赤坂2-15-27 <http://www.niri.co.jp>

双日総合研究所 吉崎達彦 TEL:(03)5520-2195 FAX:(03)5520-4954

E-MAIL: yoshizaki.tatsuhiko@sea.sojitz.com